

【研修報告】

5th Annual International Interdisciplinary Summer Institute : Health Science Education 研修参加報告

村 田 由 香*

はじめに

McMaster大学は、カナダのオンタリオ湖の南西岸部、ハミルトンにある。キャンパス内はとても美しく、緑で囲まれた広大な敷地の中に教室や寄宿寮・図書館や芸術博物館がある。その一角にあるInternational Health Officeにおいて、平成22年6月21日から25日の5日間、5th Annual International Interdisciplinary Summer Institute : Health Science Educationが開催された。

McMaster大学は1969年開学当初からPBL(Problem-based-learning)、「問題基盤型学習」を最初に導入した大学であり、臨床実践能力の育成に重点を置いている。筆者はここで、講義・ワークショップと充実した研修に参加する機会に恵まれた。そこで、以下に研修の概要を報告する。

研修の概要 (表1)

参加者は、ボツワナのBotswana大学、南アフリ

カのNorth West大学、韓国の延世大学、Daejeon大学、日本から新潟大学付属病院、本学から2名、計17名であった。

初日は、大学の紹介と学内ツアーから始まり、2日目以降、PBLの原則と実際、学生によるPBLクラスのデモンストレーション、PBLカリキュラムの展開、SP参加による演習などを通して、成人学習理論を基盤に学生の主体性を育みながら展開する教育方法を学習した。

また、PBLクラスのデモンストレーションでは、事例を用いて、研修の参加者自身が学生に、教授陣が教師役になり、教師がどのように学生をファシリテートするのかを体験学習した。

McMaster大学は臨床実践能力の育成にもいち早く取り組んでおり、その教育設備も非常に充実している。Center for Simulation-Based Learningには、専任の教員も配置されている。マジックミラーのある模擬病室やシミュレーターと会話できるように

表1 研修概要

日程	研 修 内 容	
6/21(月)	オリエンテーション キャンパスツアー	McMaster大学の概要 PBLについて概要
6/22(火)	講義	PBLの原則と実施 PBLクラスのデモンストレーション GLOBAL HEALTH SEMINAR ・阪神淡路大震災における災害看護(新道幸恵学長) ・ハイチにおける医療活動の実際(Dr. Alezandre Dauphin)
6/23(水)	講義・演習	人はどのように学ぶのか SPの活用 PBL演習
6/24(木)	講義・演習	PBLのカリキュラムデザイン SP参加による事例演習 PBLプログラムのための考察 Center for Simulation-Based Learning(CSBL)の見学 OSCEワークショップ FDについて
6/25(金)	講義・見学	学部カリキュラムでのシミュレーター活用による臨床演習の価値 4年生によるシミュレーターを用いた救急患者入院場面のデモンストレーション見学(Center for Simulation-Based Learningにて)

*日本赤十字広島看護大学 研究室26



写真1 マジックミラー設備の模擬病室



写真2 シミュレーターを活用した救急患者看護演習

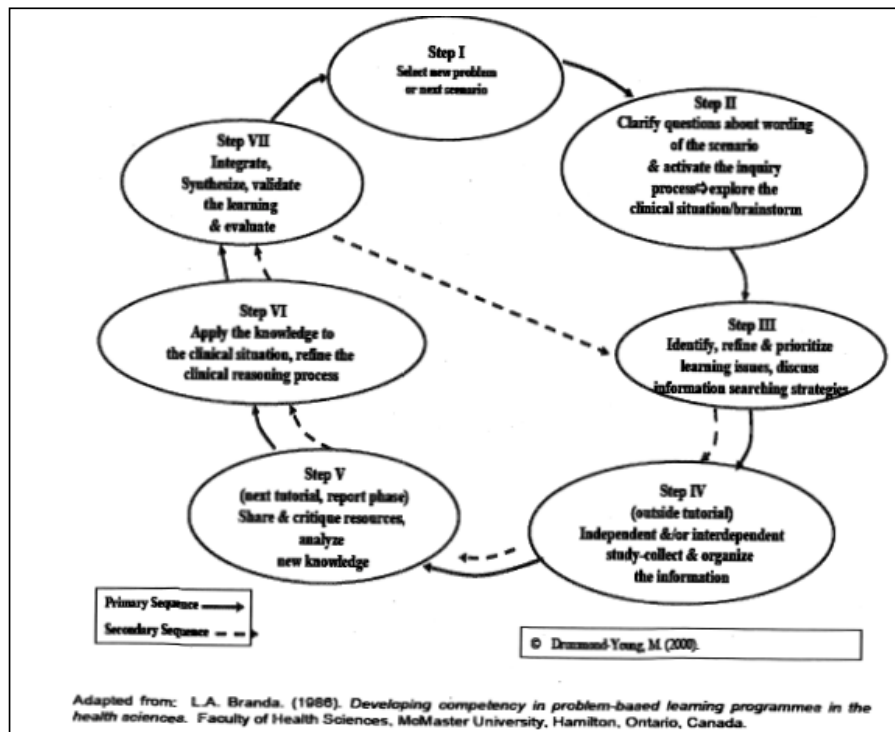


図1 A Reiterative Process (研修会資料より)

(教員がマイクを通して患者役をする) スタジオを完備した模擬病室など10ステーションが整備されていた。Center for Simulation-Based Learningでは、救急患者入院時の患者とその家族への対応場面のシミュレーションを看護師役の4年生3名、患者家族役教員2名、患者の声役教員1名によって演じられた。

2日目午後のGLOBAL HEALTH SEMINARでは、新道幸恵学長が「Disaster Nursing-from my experience of the Great Hanshin-Awaji Earthquake」を発表され、災害看護に関心を持つ学部生・大学

院・教員など多くの参加者とディスカッションも行われた。

PBLについて

ここでは、研修内容に基づき、PBLについて説明する。

PBLは、「問題基盤型学習」と訳され、McMaster大学が1969年の創立時より先鞭をつけ世界各地に広まったスモールグループチュートリアルと問題解決を中心とした教育方法である。この教育方法は、M. ノールズの成人教育学を基盤としている。

まず、課題を含んだシンプルな事例をもとに、学生がこの事例のもつ問題を解決するために知らなければならぬことは何かをディスカッションする。そして、何を知らないか、何を知らないかを講義時間内にマップのように書き出し、それぞれが分担を決めて次のグループ・ディスカッションまでに学習してくる。学習してきた内容について、それぞれの学生がプレゼンテーションをし、さらに学ぶべきことをディスカッションし、次の週までに学習してくる課題を決定する。教師は、学生がこの事例で学習すべき課題が出てくるように発問によってファシリテートする。これが反復する学習プロセスである(図1)。このようなグループ討議は、週1回行われる。チューターの教師は、7~8名を1グループとし、数グループの担当をしている。さらに、事例を演習として展開できるようにSP (Simulated Patient: 模擬患者)も養成されており、リアルに状況を再現し、訓練されたSPからも学習効果の高いフィードバックを受けることができる。

McMaster大学では、自己学習が十分にできるようなカリキュラムを組んでいるということであった。

おわりに

筆者にとって、海外での研修参加は、初めての体験であり、毎日、予習として資料の訳と講義を聞き取ることにやっとの思いであった。しかし、McMaster大学のスケールの大きさもさることながら、すばらしい教授陣と整った教育環境におけるPBL教育の有効性を実感することができ、毎日がわくわくするような感動の連続であった。

日本では、既に東京女子医科大学(1996)、日本赤十字武蔵野短期大学(現 日本赤十字大学、1998)などいくつかの看護系大学で取り組まれている。学生数が多い大学教育の中で、少人数グループをいくつも担当し、講義を展開することは、非常に時間と

エネルギーを要する。しかし、PBL教育が定着し、教育カリキュラムとして運用されていれば、効果的に、学生の主体性を育む教育を展開できることを実感した。

本学は、平成21年度に「大学教育・学生支援推進事業」(テーマB)学生支援推進プログラムに「看護学生のための早期離職予防シミュレーション・ナビゲーター」が採択され、SP養成、成長実感型OSCEに取り組んでいる。成長実感型OSCEは、学生が主体的にいつでもどこでも学習できるようにICT学習の整備やシミュレーションセンターの設置など学習環境を整え、実習前OSCE、卒業前OSCEを企画・実施している。

今後は、主体的学習として領域別看護学演習や臨床実習でのPBL教育も視野に入れて、看護技術力、看護判断力、コミュニケーション力、ヒューマン・ケアリングな関係形成能力、チーム構築力を培える教育方法の改革に取り組んでいくとよいのではないかと思った。

最後に今回の研修では、Dr. Andrea Buman教授をはじめ、大学教授陣の方々、秘書のMeaghan氏、アルバイトの在学生に大変お世話になり、心から感謝いたします。

謝辞

本研修には、平成21年度「大学教育・学生支援推進事業」(テーマA)大学教育推進プログラムで選定された「もっと世界とクロスする救済ナース育成」の助成を受けて参加いたしました。貴重な機会をいただきました本学に心から深謝いたします。

文献

森 美智子(2006)。「看護学におけるPBL・テュートリアル教育」FD研修会報告書 日本武蔵野短期大学